
夏祭り

前歯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭り

【Nコード】

N4345C

【作者名】

前歯

【あらすじ】

祭りが嫌いな「俺」は、家族に連れられ嫌々神社に来ていた。そこで「俺」は一人の少女と出会う――

（前書き）

初の短編です。

読んでいただけたら幸いです。

正直、俺は祭りは嫌いだ。それは何故かと聞かれて、一言で答えるときしたら「面倒」だからだ。何が悲しくて人ごみが多くてうつとらしい所にわざわざ行かねばならないんだ。太鼓の音だつてうるさいし。何より暑い。

「ああ、やっぱめんどくせえ」

家族、主に小学生で元気があまりあまっている妹に無理やり夏祭りに連れてこられた俺は、歩くのすら面倒だった。

妹は途中で友達と会ったらしく、今はその友達と遊んでいる。とりあえず祭りの最後に開催される花火大会までは、俺はここにいないければならない。妹の保護者として。

今、俺がいるのは神社。神社の中には屋台がたくさん建ち並んでいる。人ごみが多くて、うつとうしいことこの上ない。

とりあえず俺は、人がほとんどいないであろう神社の裏へと足を運んだ。

「あ」

先客がいたようだ。それもかなり面倒な事に、浴衣を着た女の子が一人、しゃがんで泣いている。

さすがに放っておくのは良心が痛む。ということで、俺は声をかけてみることにした。

「おい、大丈夫か？　なんかあったのか？」

俺が声をかけると、少女は驚いたようで、こちらの方をビクツとしながら見た。

年齢は—— 17、8歳？ いや、もっと下だろうか。顔立ちが幼いが、胸とかそういう出るところはしっかり出て……って何考えてんだ俺は。

「私、今年も一人」

少女はか細い声で、でも聞いていると安らぎそうな綺麗な声でぼ

つつと言った。はつきり言って、意味がよくわからない。彼氏がないから寂しいとでも言いたいのだろうか？いや、それだと、じゃあ来るなよって話になるし、本当に謎だ。

「遊ぶ相手がいないのか？」

俺はとりあえず質問してみる。

「うん」

小さな声でそう返事をする、少女はコクリと頷く。なんだこの気持ち。よくわからんが放っておけない。

「じゃあ、俺が遊んでやるよ」

自然と俺はそう言っていた。なんでそう言っただろう。普段、面倒な事にはあまり首を突っ込まない性格なんだが俺は。

「え？」

少女はもの凄く意外そうにこちらを見ている。なんか緊張するな。この視線。

「いや、別に変な意味じゃなくて、一緒に屋台とか回ってみたいかって事だ。安心しろ」

なんとなく言い訳してみる。視線がなんか痛かったからだ。

「いいの？」

「ああ、どうせ花火大会まで暇だし、全然大丈夫だぞ」

俺はそう言つと少女の手を取る。そして、屋台の方へと向かった。「なんか行きたい店とかあるか？」

とりあえず聞いてみる。やはりここは相手の意見というものを尊重せねばいかんからな。

「えつと……金魚」

「ん？金魚すくいか。わかった」

俺は少女の手を引っ張り、金魚すくいの店へと駆けていく。

「よし、やるか。お前、金は持つてるのか？なかったらおごってやるぞ」

金魚すくいの店に来た俺は、少女に提案する。まあ、お金持ってたとしてもおごってやるうとは思うが。

「私は……しなくていい。見るのが……好きなの」

少女はそう言う。遠慮しているのか？ いや、そんな様子でもではないような気もする。まあ、ここは俺が華麗な技で金魚をすくってみせよう。そうすれば少女もやりたくなるかもしれない。

「んじゃ、とりあえず俺やるからな」

そう言って店のおっちゃんに金を払い、俺は水の中を見る。中の金魚はスイスイと元気そうに泳いでいる。赤いやつ、黒いやつ、そして緑のやつ……ん？ 緑？

「いや、おっちゃん！ 緑のやつは金魚じゃないから！ 絶対違うから！ いや、なんかこいつすんごい俺の事睨んできてるんですけど。前世はヤンキーかこの野郎！」

激しいテンションで俺はおっちゃんに抗議する。だが、おっちゃんは「何も言わずにそいつを捕るのが男つてもんδει」と言って全く取り合う様子はない。一体どこからこんな謎の生命体を仕入れて来たのだろうか。

「ちつくしよおおお！ 捕ってやるぜ、捕ってやるぜこのヤロー！」

俺は叫ぶと、力任せに緑の金魚——いや、謎の生命体を取ろうとする。しかし、こいつは一筋縄じゃいかない。俺の力まかせ大作戦は失敗に終わってしまった。

「ちつきしょ」

水の中をもう一度見ると、謎の生命体がちょうどこちらを向いたところだった。気のせいだろうか、謎の生命体の口の右端がつり上がったように見えた。まるで俺を嘲笑うかのように。

「こいつ……俺のことを笑いやがった……いいだろう……俺はお前を必ず捕る！ おっちゃん、もう一回！」

高らかに叫ぶ。周りから哀れみに満ちた視線を感じるが、そんなものは関係ない。これは俺と奴との闘いだ！ 男には引き下がれない時があるのだ。

「フツ……俺は熱くなり過ぎていたようだ。ここは心を穏やかにし

て心の目で見るんだ」

なんか俺、すごい痛いこと言ってるような気がするけど、奴に勝つには周りの目など気にしてはいけない。

俺は心を静め、心を無にしてい——俺は徐々に水と一体化してきて、そして——見えた！

「もらった！」

凄まじい速度で俺は謎の生命体をすくい上げた。そう、俺は勝利を勝ち取ったのだ。

「やるねえ兄ちゃん」

おっちゃんはその言う謎の生命体を水と一緒に袋に入れて、手渡してくれた。

「ふう……どうだ？ お前はやらなくていいのか？」

俺はそう言いながら少女の方を向いた。少女は笑っていた。少女が初めて見せた笑顔が、なんだか俺には眩しかった。

「私はい……今ので楽しかったから」

少女は笑顔でそう言った。

その後、俺たちは様々な店へと立ち寄った。わたがしを買ったり、くじびきをしたけど、よくわからない何とかカードが当たったり、射的をしたり。ちなみに、俺は射的で何かとって欲しいものはないかと聞いたら、迷わず少女は、骸骨の人形を指差した。その横には可愛い感じのデイベアがあっただが、彼女は骸骨の人形の方が好ましい。見事俺がその人形を獲得すると、またあの眩しい笑顔で「ありがとう」と言ってくれた。それだけで俺は嬉しかった。

そして今、俺たちは花火を見ている。大空に舞い上がった美しい花びら。不思議と、普段あまり見たいとは思わない花火が、今はひときわ美しく見える。少女のおかげだろうか。

「来年もまた……遊んでくれる？」

唐突に少女がそう言った。

「来年？ これから毎日でも会えばいいだろ。夏休みだからいっぱい遊べるぞ」

そう、これから毎日会いたい。俺はそう思い始めていた。間違はなく俺はこの少女に惹かれている。

「うつん……ダメなの。でも、来年の夏祭り、また一緒に遊びたい」
何故ダメなのだろうか？ 遠くから来てるのか？ ならば俺はそこまで追いかけていくぞ。

「あ、最後の花火だ」

俺はそう言い、空を見上げた。最後の花火だけあって、一番綺麗な花火だった。でもその美しさも一瞬で消えて、また空は暗く寂しい空に戻る。

「来年も一緒に見ような」

俺がそう言つて、横を向いた時、もう少女の姿はなかった。その時、ふわりと優しい風が吹いた。それはとても心地よくて、少女からの「ありがとう」のメッセージのように思えた。

それから俺は毎年、夏祭りには神社の裏へ行くようになった。俺はこれからも行き続けるだろう。彼女がまた現れて、そして、俺の気持ちを伝えることの出来るその日まで――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4345c/>

夏祭り

2010年10月8日15時45分発行